

山形短期大学民話研究センター資料叢書

お婆の手ん箱（一）

阿部キヌオさんの語り

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

お婆の手ん箱（一）

阿部キヌオさんの語り

編 武 田 正

お婆の手ん箱（一）

阿部キヌオさんの語り

はじめに　―大井沢（西川町）について―

五

1 祖母から聞いた

一四

作内ばなし・ねずみと子ども・瓜姫子・狐に
化かさった話・のろのろ話

2 冬の語り

三五

牛方と山姥・食わず女房・コンニャクの舌・

猿舁入・桃太郎

3 山村の動物

かつこ鳥・時鳥と兄弟・団子どの・弘法水・
弘法伝説・福の神

六三

阿部キヌオ

明治三十七年五月一七日

西川町大井沢中村に生まる

はじめに — 大井沢（西川町）について —

阿部キヌ才婆さんに初めて会ったのは、昭和五十一年十月二十三日におこなわれた山形県芸術祭の文学祭「民話の語り」の終了後であった。「私も少し知っている」と話かけられて、それでは早速聞きに参上したいと申し上げたところ、いつでもいらつしやいと言われて、住所を手帳にひかえたのだったが、私の都合でなかなか行けず、ようやくお邪魔することが出来たのは、今年に入ってから三月二十日であった。雪の多かった今年の正月以来、雪の消えるのばかり待つて暮らしたみたいなのであるが、ようやくお会いして、勝手にいろいろな話を聞くうち、昔話の調査しか考えていなかったことを反省しなければならなくなった。「語り手」に語らしめるのが昔話だけでよからうはずはない。私は阿部キヌ才婆さんの語るものを全て記録にとどめておくべきだと、咄嗟に考えて、勝手な間を投げかけ、そのままテープにした。一つの無駄もない話ぶりに、改めておどろきなが

ら、その記録をしようとしたのがこれである。今後、何回になるか、今から楽しみながら記して行くことにしたい。

阿部婆さんは大井沢生れで、明治三十七年五月十七日の生れだから、今年で七十三才になる。実家は大井沢の延長坊という宿坊で、祖母佐竹いせから数多くのいろいろなことを聞いて育った。祖父は鴛の数馬であった。父母は文仲、キクヨで、いくらかの昔話は父文仲からも聞いたという。十八才の折に朝日町立木字木川に嫁したが、その婚家は朝日行者（神主）の家であった。今も鏡、太鼓、神像を祭壇に安置している。

大井沢の民俗調査は、すでに佐藤義則氏によって『大井沢中村の民俗』（昭和四十三年三月刊）として出版されている。ガリ版一五六頁のものであるが十数年の採訪から生まれたものだけに、宿坊の部落の全貌がよくまとめられてある。大日寺を中心にした古文書をも丁寧に読んだ上で、二十名ほどの方々にお会いしての聞書でもある。その後も『西川町史編集資料第一集、妙学坊文書』が西川町教育委員会より刊行され、水没地区（寒河江ダム）たる西川町の『月山沢・四ツ谷・

砂子関・二ツ掛の民俗』が山形県教育委員会によって刊行された。それらの中から、大井沢の人びとの生活の一端を写しとって、阿部キヌ才婆さんの聞書のまえがきとしたい。

出羽三山の登り口は明治以前には七つの登り口があったという。羽黒口、肘折口、大井沢口、本道寺口、岩根沢口、大綱口、注連掛口である。それらの登り口を利用して入りこむ道者はそれぞれの口にある別当寺の出す入山切手をたずさえ、許可を得て、山先達に案内されて三山を参詣するものであった。

大井沢の別当寺は大日寺であり、この大日寺の近くには多くの宿坊があつて、道者は大抵行き帰りにそこに泊まった。近くには砂子宿、月山沢などの部落もあつたが、これらの部落の宿は参詣人に物を売ったり、荷物をとめるための商人宿であり、荷物の駅であつたから、道者を泊めることは、明治以前にはできなかった。大井沢に泊まった道者は、朝、宿坊を出ると、昼は志津で飯をとり、本道寺から登った道者と一緒になって、玄海清水から姥ヶ岳をこえて湯殿山に入ったもので

ある。湯殿山は五穀豊穰の神であつた。

大井沢部落には大日寺の下に塔中六ヶ寺、門前百姓六軒、二坊があつたという。

大日寺の門前には福蔵院、連花院、金蔵院、妙智院が、かつてあつたといわれるが、そのうちの妙智院は享保十一年（一七二六）に新しく建てられ、その後裔と見られるのが、現在の志田与一氏宅の「妙学坊」であるという。この大日寺のあるところが大井沢中村で、その中村の宿坊は次のような名で、今に残されている。

妙学坊（志田与一郎） 門長坊（志田新助） 西蔵坊（志田修太郎）

来雲坊（志田 良） 正善坊（佐竹正守） 長伝坊（志田一夫）

宝山坊（志田国恵） 宝性坊（志田栄一） 延長坊（志田作馬）

佐教坊（熊谷勝則） 長元坊（志田 賢） 両山坊（志田運弥）

円学坊（志田卓一） 小武坊（志田正見） 宝来坊（志田 宝）

右近坊（佐藤文友） 長山坊（志田真一）

以上十七坊であり、他に湯殿山神社宮司（大日寺跡）の志田卯兵氏が神官である。全部で五九軒の部落であること、しかも分家も多いから、本家筋だけを拾え

ば三十六軒であり、宿坊は部落の半数弱をしめることになる。残り十九軒の中には大工、宿、糶屋、木地師、商店の他は農家があるが、大日寺の門前部落であつたことはこれで十分納得ができよう。

道智上人の石像が湯殿山境内にあり、大日寺中興の祖として尊ばれている。この道智上人の生きた時代は応永年間（一三九四～一四二八）であるから、大井沢の歴史はきわめて古いものがあるといえる。寛文十三年の検地では百四十二軒、明治八年の調査では百十三戸であるから、当時としては大いに栄えた宿坊の部落であつたことは十分想像できよう。

「妙学坊文書」の一つに「宝暦五年乙亥年大不作」という文書があり、大日寺があつたために、大飢餓を生きのびることができたようである。残念なことに後半部が失せているが、いかにこの年の凶作が悲惨であつたかは残された文書でも十分知ることが出来る。（全文は『西川町史編集資料第一号』にあり）

三、四月になつても山の雪は消えず、朝霜でようやく芽を出した草木も焼枯し、苗も育たず、五月半ばから再び長雨で、九、十月まで続いたために、五、六月頃

には大小の橋も流され、夏にはウンカが発生、稲は黒ずんで立枯れの状態であつた。畑のものも、大豆は水焼け、そばは半実、茄子は花咲かず、なんばんは虫喰いで倒れ、わずかによかつたのは、蕪と大根だけであつたと記されてある。米の値段は日に日にあがり、村人は仕方なく山菜でしのいだ。ミズ、ふき、よもぎ、土葉、あざみなどである。かてものとしては、ぶなぐるみ、はしばみを採つて、よくこれを煮、臼で搗いて混ぜものにして食べた。

冬に入るやいっそう食に困り、馬にやる「くぞの葉」を食い、糠をこうせんにしたり、粘つて食う者もあり、しいなを食べ、ツタの葉、松皮、わらび根、ぶなの葉を食べたりした。熊狩りは本来しない部落であるが、熊狩りも精出したと記している。

春になつては種籾もなく、茄子苗もない有様で、秋からの行者は一人もなかつたために、宿坊の生活、ひいては村自体の生活はどん底の状況であつたらしい。大日寺は本道寺その他と連絡をとり、村役に訴え、蓄財を放出して救済に當つてようやく飢餓をくいとめたということである。こういったときにこそ庶民の知恵

袋は大きい意味をもって来たのではないだろうか。

文化の交流は、他の文化の流入によって活を入れられるという。行者や商人などの持つてくる文化は大井沢の文化をいつも生きいきとよみがえらせていたものにちがいない。

草分けといわれる志田弾正の「弾正塚」が弘法水、山神社のそばに残されている。彼は平将門の末裔といわれ、弾正の遺品は志田五郎右エ門家に残されていたという。（現、志田栄氏宅である）。しかし数度の火災で失われたというが、そのうちの二点について、こんな伝説がある。一つは仏絵図である。火災の時に近所の円学坊の川くるみの木に飛んで来たので、火災をまぬかれた。現在は円学坊で保存し、毎年十一月十五日にこの仏絵図「阿弥陀様」が御開帳されているという。もう一つは「開けられずの巻物」である。これは弾正の系図書きであったとも、若き弾正の恋文一巻であるとも言われているが、残念ながら火災で焼失してしまっただけという。

この地には「木花咲耶姫」の伝説がある。むかし、お天道様に二人の姫があり、

この二人を月山と朝日岳の神に鎮座させることにした。ところが、二人とも月山に登りたいというので争いになってしまった。お天道様は二人に一本ずつの桜の木を与え、「早く花咲かせた方に月山をやる」といった。姉の桜が咲きかけたのを知った妹の方は、ある夜、こっそり姉のものと植かえて、ついに月山をもらうことになった。それで妹の方を「木花咲耶姫」と呼ぶ。また姉の方はしぶしぶ朝日岳に行ったが、盗みをする人をきらい、朝日岳に近づけなかったという。この朝日岳には「蓮華往生」の伝説も残されている。

また朝日岳から北の月山、湯殿山にわたる連峯の中ほどの山が「天狗角力とり山」である。県内の天狗が一月十日にこの山に集まり、角力をとって、そのあとに餅を搗いて食べたところといい、いつも箒の目が立っているようにきれいになっているという。正月十日は、だから村人はこの山にはのぼらない。

もう一つ、「二つ石山」がある。この山では朝日権現の天狗と月山権現の天狗が法力くらべをしたが、どちらも秘術をつくしてゆずらず、そのまま石になったという話がある。

大井沢小中学校の管理する「大井沢自然博物館」がある。自然にめぐまれ、多くの伝説をもち、古い歴史を経た大井沢にも過疎の問題はようしやなくふりかかって来ている。そして寒河江川を堰止めて寒河江ダムが建設中でもある。今、ここに、阿部キヌ才婆さんの手箱を聞いて、五、六十年前の大井沢の生活をふりかえって見ようとするのは、決して意味のないことではない。

なおこの稿を起こすに当り、一緒に話を伺った川部敏男氏の協力に感謝する。

お婆の手ん箱

1 祖母から聞いた

祖母の佐竹いせという人は簪取りだった。その旦那で自分にとつてはおじいさんは数馬という人だったげんど、昔話などは全然話してくれなかった。おとうさんは、たまに教えつかった。佐竹文仲というのがおとうさんだ。

「猿罨入」の最後の、猿が木から落ちて流れて行くときに、猿がお姫さまにいうのは、たしか

へ 猿沢に流るる命はおしくない

あとでお姫がお泣きやるべえ

と、うちのおばあちゃんたちは付けて語ったもんだなあ。そして、昔話むかしが終ったとき、うちの方では、こういうふうにつけたものよ。

へ どーびんさいすけ、さいぎぶろう、さいぎのまなぐに火がはねて、けん

けん毛抜きで抜いだれば、まんまん真赤な血ができて、めんめんめっこになり申した。

て、長くくつつけて終りになったもんだ。これが山形新聞にいつか載ってだったが、ははあ、あたしたち子どもの時分に聞いたと同じだなあと思って、娘さも言ったもんだ。こいつは昔話終つど、いつでもつけたもんだな。ああ、そういえば、一番始まりは、「むかしあつたけどなあ、あるところになあ」て、こういうふうに、「むかし、むかし、とんとむかしあつたけどなあ」なて、こういうので始まったもんだな。そして、

「あるところになあ、作内という人がいだんだけど。」

これは父親から聞いた昔話なんだけど、現実にあつた話だつて聞いたもんだ。それに、合いの手というか相槌というか、「オット」といったもんだ。

生まつた家は大井沢の延長坊というところで、三山の先達なもんで、んだから佐竹延輝（現在東京へ移住）の名前は延長坊の「延」の字をとつて名付けだんだ

な。んで、宿坊は大井沢にいっぱいあって、自分の家は延長坊、隣の郵便局は妙学坊、円学坊、佐教坊、右京坊、宝来坊、西藏坊など十三軒あるはずだな。そのうちで、今神主していんのが円学坊ていうどこの三代目か四代目で、いや四代目が五代目だな。宝性坊ほれから長元坊、両山坊というのもあるな。

んで、正月ていうど、必ず社務所（現湯殿山神社、元大日寺跡にある）さ集まって、ほして朝晩拝み上げ、朝は七時頃から十時頃まで、夜は六時頃から七時頃まで、これは元日から八日の朝まで必ず社務所さ、坊の先達が集まって拝み上げしたもんです。そして自家あたりは、坊の会作つていで、講中で、月に一回、七日の晩、巡り宿でめぐりばんこに、お茶、あとお汁程度にして、そして月山、湯殿山、羽黒山のお祓い、祝詞を上げたもんです。のりとあたしは〈耳なり雀〉にそれを聞いてます。こつちも今は神主さ嫁に來たんだげど、朝日岳の神主の家に嫁に來たんです。

先祖の、この像（自宅に安置してある神像）を寄付した人は、〇〇大姉というから女の人で、田地田畑みな寺さ寄付して、木川というどさ移った人らしくて、

むかし漆は大切なもんで、左沢（大江町）公時代に漆の木の番人に、「あんたが行げ」て言わっで、行がねど首切られるので、木川というところさ移って、漆の木の番人したらしいです。この話は立木部落でも知ってる人もいますよ。んだから財産もええあんばいあったらしいの、なかったら神社に寄付できないものね。山から畑からもっていた人でしろう。

立木という部落は、宮宿（朝日町）から朝日岳にのぼるとき通って行く部落で、西川町から行けば別の方通る。それから荒砥（白鷹町）から行けば、また別な道通るし、普通行く道は五つあって、庄内の方から行けば朝日岳を縦走することになって大井沢に降りるとか大江町に降りるとかということになる。んだから朝日岳さは、庄内の方からと、小国の方からと、荒砥の方からと、西川町、左沢からと五つあることになる。

うん、昔話で一番よく聞いたのは、「作内ばなし」だなあ。語ってみつか。

へ 作内ばなし へ

とんとむかしあつたけどなあ。

むかしむかしのそのむかしだけでも、大井沢というどこに、デヤガワというどころあります。それでそこに、あんまり天気もええし、すつから、袋さ、あれだこれだて果物やら御飯やらいっぱい入れて、ほして雑魚釣りに行つたけどなあ。

ほうして、ぐいぐい、ぐいぐい行つたら、デヤガワというどこさ行つたら、雑魚というげんど、これイワナなんです。雑魚いっぱい、釣つたんだつて。して釣つて、こんど釣つてるうちに、ついつい、あんまり掛かるもんで、暗くなつたんだつてはあ。

向うにシシ小屋あるんだつてな。あの熊狩りに行くときのシシ小屋な。ほしてそこさ泊つて、こんど夜、火どんどん、どんどんとシシ小屋さ焚いで、そして魚を、こんど腹悪れぐなるから、腹わた取って串さ刺して焼いていたど。ほしたら、真夜中になつたらよ、火どんどん焚いでいだけども、

「おらはあ、そうたら、行き申さねちやなあ」

ていうんだど。ほしたら、

「そうたほどに、来るなというたの」

また、「おらはあ、そうたら、行き申さねちやなあ」ていうど、「そうたほどに
来るなというたの」。

ほしてこんど、作内いたどこさ、「作内、雑魚食^かせろ」て入って来たんだど。ほ
して作内、たまげて入って来たの見たれば、一つ目の^{まなぐ}どうでん坊て、むかし言う
た、そういう風な化けものだったど。ほれがら作内がね、

「入^まって、食^くらえ」

ていったど。ほうしたれば、のたりのたり、のたりと入って来て、片っ端から
取って、ばぐばぐ、取ってはばぐり、取ってはばぐりて、みな食^くべだんだてや、
雑魚。ほれから、

「ほんじゃ、おれも食^くわれるんでないかなあ」

と思^{おも}って、そおっと、そのどんどん燃^もえっただどこさ、野差し（小刀）焼^やいだん

だてよ。ほうして、どどのつまりね、腹皮、「ひつくるまゝ、ひつくるまゝ」で、伸ばしたんだって。んだから、その真赤に焼けた野差しを、「まいったべな」で、腹の皮さ上げたれば、「あつい、あつい、あつい、あつい」で、〈ひつくるまゝ〉で、したなき、からんで、

「作内、かんにんだ、かんにんだ」

て逃げて行つたんだ。ほして、夜早く明けたればええなあと思つて作内が待つていだんだ。ほしてこんど夜明けたから、白々と明けたから見たら、血、ボダボタ、ボダボタとたらしで行つたもんだから、行つてみたれば、木の根っこさ頭突つこんで、ウエンウエン、ウエンウエンでいだつて。ほれからそろそろ棒持つて来て、「こん畜生、こん畜生」で叩いてみたれば、狸の化物だけ。ほれからこんど、魚の代りに袋さ入つてきて、ほうしてこんど家さ持つてきて、

「とうちゃん、魚盗らつじやが」

と言わつて、

「魚どこでない。まだまだええもの獲つて来たから、みんな来てみる」

て、子ども大勢いるもんだから、したれば見たれば見たことも聞いたことない奴だつて。それを皮剥いで、そつつの家さも少し、おすそ分け、こつつの家さも、少しおすそ分け、みんなさやつたれば、すごく喜ばつてよ、

「ああ、お前ださ、こだなうまい肉もらつたんだもの、こいつ駄賃だ」

とて、みんなからもらつて、みんなで喜んで御馳走なつて、喜んでけど。ていうはなし。どーびんさいすけ、さいぎぶろう、さいぎの目さ火がはねて、けんけん毛抜きで抜いたら、まんまんまつかになり申して、めんめんめっこになり申した。した。

「どーびんさいすけ、さいぎぶろう、さいぎの目さ火がはねて、けんけん毛抜きで抜いたら、まんまんまつかになり申して、めんめんめっこになり申した」て、指で顔をなぞつて、顔遊びしたもんだ。そうして聞かせつど、孫たち、「もう一つ聞かせろ」て言うもんだつた（笑）。

へ ねずみと子ども

むかし、あるところに、秋になったら、子どもがいてな、栗いっぱい実^なったから、山さ栗拾いに行つたど。袋持^たつてね。

ほうしたら、栗いっぱい落つで、二人で行つたんだつて。ほうしていっぱい落つでだから拾っているうちに、暗くなつたんだけどはあ。暗くなつたから、何とも仕様ないし、遠い遠い山の中だから、子どもたちも家に帰るに帰られなくて、ほして、栗の木の根っこさ野宿したんだつて。

ほしたら、暮^くごろ、栗の木の根っこに、こんな一つ孔があいっただんだつて。ほしてほこでチククヨ、チククヨ、チククヨ、孔の中でいうんだどよ。ほれから、袋さいっぱい拾つただけどな。その中さ一つ入れだど。ほしたらチククヨ、チククヨ、チククヨというもんだから、面白くて面白くて、全部入れてしまたんだど。ほしてるうちに暗くなつたんだど。して暗くなつたれば、どこから、ほの、ええおかあさんが出てきて、ほして、

「あの、うちの息子たち、今日はどうもごちそうさまでした。んだから今夜、おら家で、餅搗くぞこだ。んだから餅招ばつでけらしやい。んだからちよつとあんた方、目つぶつてでけらしやい。家さ着くまで」

ていうことになって、目つぶったんだつて。子ども二人が。ほうして行つてみれば、御殿のように大きな家で、さまざま飾つてよ、一生懸命、ねずみたち、餅搗きしたんだだけ。ほしてね、

へ 何にもおかない

ニヤーの音だけ おかない

孫ひこの代まで

ニヤーの音ばり聞かないように

スットコイ スットコイ

て、餅搗いだんだど。そしたら兄の方は、「ニヤオー」て言つたど。ほしたれば兄の方が、ぼいっと目覚めてみたらば、木の根っこさ野宿したんだけど。弟の方だけは、

「さあさあ、お客さん、餅できましたから、食べてください」

と言わっで、そして、

「小豆餅ええか、納豆餅ええか、クルミ餅ええか。何でもええもの食べてける」
ほして、いっぱい御馳走になったんだって。ほしたれば、こんど行ぐどき、

「何、土産ええ」

て言っじやんだど。

「何でもええ土産上げっから、家の子どもたち、こんなに御馳走になったんだから、何でもええ奴、土産に上げる」

て。弟の方は、何土産もらったらええか、まず訳わかんねわけだ。ほうしてるうちに、夢みたいなもんで、ぼいっと目覚めてみたら栗の木の根っこの下で、また眠てだんだんど。子どもらだ。

うちのおばあちゃん、よく聞かせたもんだ。そう言えば最近の「絵本」は大分変わってますね。「瓜姫子」という話、わたしだち語んなど違うようだな。やっぱり

これも土地土地によって語り方がちがうんでしょうね。

へ 瓜 姫 子 へ

あるところに、おじいちゃんとおばあちゃんいだけどな。ほうして、ほのおじいちゃんとおばあちゃん、子どもなしで、山さ、おじいちゃんは柴刈りに、おばあちゃんは川に洗濯に行ったど。ほして、あんまり暑い夏なもんだから、畠さ瓜植えつだんだけど。ほれから洗濯して来て、畠さ廻って見だれば、大きな瓜実^なつてだから、

「ああ、お昼に、こりや、冷やしておいで、おじいちゃんと二人で食べようかな」と思つて、ほして、瓜を畠からもいで来たど。ほしたれば、じいちゃんが山から柴背負つて帰つて来たど。

「じいちゃん、じいちゃん。暑がつたべ。んだから大きな瓜、まず、熟していたから、ほの瓜でも割つて、御飯前に食つたらええがんべ」

ど。ほしてまず、水から上げて、瓜割んべと思って、庖丁当てたら、パカッと割つて、庖丁当てたばりで、ほしてオギヤーオギヤーで、女の子が生れたど。ほれから、ほれあ、

「ほんじゃ、おれとお前さ授つた子どもだ。んだから、これは大事に育てよう」
て、いうわけで、一生懸命育てて、今、年頃になって、年の頃だど十三、四になつて機織りする。して、機織り教えだんだつて。ばあちゃんがよ。ほして、

「瓜姫子、瓜姫子」

て、めぐくてめぐくて、ほれ、自分の子どもだから。ほして教えつたらば、その部落のうちに、天邪鬼という男の子いるらしいんだな。ほしてその男の子が、瓜姫子ば好きになつたんじゃないかな。ほして、

「瓜姫子、今日な、ホドイモ掘りに行つて来て、瓜姫子好きだから、イモ掘つて来て食せつから、お前一人ばり留守番して、機織りしてろな」てな。

へ クダもない カーラカラ

キーコーパツタラトン

クダもない カーラカラ

キーコーパッタトン

と織つてろて、こういうわけだ。おばあちゃんはな。「天邪鬼なの来たたて、決して戸開けてなんねぞ」て、教えて行つたんだって。ほしたら、じいちゃんは山さ柴刈りに行つたし、ほうしてゐるうちに、

「瓜姫子、遊ばねが」

て、来たんだど。ほれから、

「ばあちゃん、機織りしてろていうから、遊ばんねなだ」

て言うたら、

「ほだごと言^やねで、遊べ」

て言うげんども、「遊ばんねなだ」て。ほしてまず、キーコーパッタトンて、織つてだわけだ。ほしたら、

「少し戸あけて見せろ」

て、言つたて。天邪鬼。

「いや、戸開けんなていうから戸開けらんねなだ」

ていうたげんども、

「ほだごと言^やねで、ほんのちよつぱりええから、開けて呉ろ」

て。ほんのちよつぱり開けてやったんだけ、瓜姫子が。ほしたらばガラガラツと開けてきて、ほして天邪鬼、瓜姫子ば裸にして、ほしてこんど、瓜姫子ば殺して、自分がその着物きて、ほして、

へ　ズッタラ　バツタラ　ギイ

ズッタラ　バツタラ　ギイ

て、機織つてだつて。ほしたらばあちゃん、山から帰つて来てな。

「ほども、いっぱい掘つてきたから、瓜姫子好きだから、ほどもいっぱい煮てやつから、ほれまで織つてろな。何だか今日の機の織り具合、あんまり音ええくないな。ズッタラバツタラ、ギイっていう。いつもだと、キーコーバツタラ、トン、クダもないカラカラって織ってるんだげんども、今日の織り方、あんまりええくない織り方だ。なして機の木が少し狂つてたんだか、何だか知しやねげん

「ども、あんまり、ええぐない」

「んだか」

て、ズツタラバツタラ、ギイって天邪鬼織つてだど。ほしたれば、

「ほどいも煮^ねたがら、瓜姫子、瓜姫子、ほどいも煮たから、ほんじゃ早く来て、食べろ」

て、ばあちゃんが言ったんだど。ほしたれば、ばあちゃんが言うて来て、ほどももの皮も剥かないで、そうしてがむがむ、がむがむ食べたど。ほしてばあちゃんが不思議にしたんだど。

ほしていたところが、こんど何という殿さまだか知しやねげんども、殿さまの家から、

「瓜姫子の評判もええし、器量もええしすつから、お姫さまにもraitたい」

という使いが来たんだど。んだげんども、

「一人娘だから呉らんね」

ほしたれば、

「じいちゃんもみんな連れで行ってええから、もらいに来たから、是非^{ずし}とも呉でける」

てよ。

「んだげんども、手塩にかけて、これだけ永く育てた娘、呉らんね」

「ほだごと言^やねで呉でける」

ていうので、今度、じいちゃんも帰って来たもんだから、

「ほんじゃ、わたしだも一緒だったらば、ほんでは仕方がない。ほんではわたしだも一緒に行つて、まず樂させてもらうべ」

ほしてこんど、車さのつて、御殿さ出かけたわけだ。ほしたれば山の頂上さ行つたらよ、きれいな鳥飛んできて、啼いで、

へ 瓜姫子ののり車に

天邪鬼 ぶつのつて

ピーヒョロ ヒョロ

て啼いだんだつて。そこで一休みしたんだから、その鳥は何回も何回も木の枝

さ止って、

へ 瓜姫子ののり車に

天邪鬼 ぶつのもつて

ピーヒョロ ヒョロ

て啼くんだってよ。ほれから家来たちもおじいちゃんもおばちゃんも不思議して、もしかしたら、天邪鬼、瓜姫子ば殺して、化げでいたんじゃないかなあと思つて、不思議してな、「着物脱いでみろ」て、脱がせてみたんだど。ほしたらば腕あたりさ、毛もさもさ生えて、瓜姫子、なくて、天邪鬼化げっただんだけど。ほれから、「この畜生！」ていうんで、カヤの中ずるずる、ずるずると引張ったんだとよ。んだもんだから、

「堪忍してけろ、堪忍してけろ」

て言っじゃげんども、瓜姫子ば殺したんだも、堪忍されるもんでない。ほして殺してみたれば、カヤの中の赤いのが、あれが天邪鬼の血だて。ほして、じいちゃんとおばあちゃんだけ御殿さ殿さまんどこさ引きとらつて、楽々と暮したんだけど。

へ 狐に化かさつた話 へ

これは実際にあったことだて言うんだげんども、ほの大宝院という家は、今でも西川町のジョージマというところにあります。そこの法印さまの話になつて残つてます。

そこでな、法印さまが、あるところに頼まつじえ、行くどき、途中行つたれば狐が昼眠しつたんだだけ。ほれからほれ、法印さまだから、ホラの貝、腰からとつて、山伏が吹くように、狐の耳さ当てて

ブホンブホン、ブホン、ブホン

て吹いだんだてよ。ほうしたれば狐、目キヨロキヨロさせて、一目散に逃げ行つたわけだ。ほして途中まで行つたればよ、曇つてきて、まつ暗になつて来て、雨降つて来たんだど。ほれからこんど、

「雨宿りしねでは行かんねべな。どこか雨宿りすつどこないべかな」

どて、雨宿りすっと思つて、ちよつとほこに神さまのお宮あるんだど。

「ここで、お宮さまあるもの、ここでちよつと雨宿りすっかな」

て思つて、大宝院がほこさ雨宿りしたんだど。ほうしたれば、しばらく経^たつたれば、向うの方でな、火どんどん、どんどんと焚いてよ、ほして棺かついで来るんだど。ほして段々^{だんだん}近づいて来たれば、ほのお宮のどこさ来たんだつて。

「さあ、ここだ、ここだ、ここだ」

て、ほの棺おろして、火どんどんとつけて、ほして皆んな帰つて行つたんだつて。ほうしたれば、こんど棺の中から、ほの化けものは出てきて、ほれからこんど恐かなくて恐かなくて、大宝院が、ほこに大きな杉の木あるそうだ。ほしてほの杉の木さのぼつて行つたんだど。ほうしたれば、

「大宝院がどこにいた。大宝院がどこにいた。昼の山伏どこにいた」

て、段々追いつめらつて、しんぼえまで行つたんだど。ほれから今すでに食われそうになつて、こんど困り果ててなあ、そしてこんど、腰からホラの貝とつて、ブホンブホン、ブホンブホンて鳴らしたて、ほしたればポカツと明るくなつたん

だって。ほして見たれば、木の上さのぼって、大宝院がいんだだけど。んだから、狐からしつぺ返しされっから、いたずらさんねもんだど。

子どもらには、「大宝院がどこにいた、のたりのたり」て、手真似しいしい、教えたわけだ。んだど、「ばあちゃん、もう一つ、もう一つ」て言うもんだった。いつまでも「教えろ、教えろ」て言うからな、〈のろのろ話〉だな。口すっぱくなるほど教えても、ほれでも、「ほんじゃ、長い長い、長い長い話教えっかな」てな。

へ の ろ の ろ 話 へ

蛇がな、今日ものろのろ、明日ものろのろ、あした明後日ものろのろ。あさってあとどーびんよはあ。

この話すつど、子どもたち飽きて、「あと、たくさんだはあ」て言うもの。

2 冬の語り

うちのおばあちゃんは、夜三時間ぐらいは友だち三人ぐらい、コタツさ当ってで、そして教えたもんだもな。冬が昔話、いちばんで、夏はあんまりな。コタツさ当って、いもの煮たのとか、焼き餅とか。「かゆ餅」な、粥煮て、坂の上さ丸くな、いっぱい並べて置いてな、凍みらがして、凍みてからワラで編んで、ぶら下げてな、こんどそれを油で揚げたり、砂糖醤油をつけたりして、あたしだよく食べたまんです。

凍み餅の作り方か。餅搗きは、壺斗五升搗いたら、栗餅も五升、キビ餅も五升、そういう風にして搗いて、水き漬けて一晚雪にさらして、それからこんど家の中さ下げておくの。外さばり下げておくと、「日向くさくなる」といったもんだ。寒のうちだから、大寒になると作った。寒のうちにした水は、決して変んねんだつてな。んだから漬物も寒のうちに水入れつど一番ええていうことになるわけだ。家の方でなんかよ、糯米三升ぐらい寒のうち三升ぐらい水き漬けて、ほしてこれ

をこんどは水から上げて、ほしてこれをこんど上げて、内干しして、それを粉にはたいておくと、一年中保もつたて。二年経もよつても変もんねの。毎年やつけな。「寒漬け団子」ていうけの。寒の水き漬けてやるので、糯米だから柔かくて、ちょうど今の白玉粉みたいになるもんだ。今の人は知しやねべな、そういうことは、おそらくな。昔の人はそれをやったもんだ、どこでも。腹悪くしたなんて言うど、それ一番ええんだってな。腹さはな。寒のうち三十日漬けるんだも、寒の入りから寒の終りまでの三十日な。それをよつくと洗って、上げて、それを粉にはたいて、臼で。ほして「絹ぶるい」でふるって、そしてこんど内干しするわけ。外さ出しておく、日向くさくなるから。さらさら、さらさらて、うまいもんだ。二年置いだって三年置いだって何ともないの。虫一つつかねの。昔はそうやったもんだ。今は防腐剤なの入れつけんどもな。

うちのおばあちゃんは器用ていうか、糯米を洗って、内干しするんだって。外に出せば米が二つに割れるな。割んねえようにして、お菓子の材料作ったもんだ。

『おこし』ていうて、家にはその道具もありました。彼岸のうちでない駄目で、金の道具で、ちよつとくぼんだのに入れて火焚いて、黄粉練つて、おこしさも飴と砂糖入つて、黄粉でくるくると巻いで、切つて売つたもんだつて。『黄粉おこし』ていうていたな。それから『笹まんじゅう』作つたもんです。ほら、今蔵王で売つてんでしょう。あんな小さなもんでなくて、二つで一錢だつてがなあ。それも、ふかし加減があんの。十分なら十分でふけると思つたら、途中で絶対蓋取んねようにしねど駄目で、途中で蓋とつど、ふぐんねぐなるてよ。もう一軒でも、それやつたけが、そこのまんじゅうは小つちやくくて、おら家のまんじゅうは大きいわけだ。材料同じもの使つても、水こねと蓋取らねというのが秘訣だった。その、ふかす前のものをゴザさいっぱい並べておくもんだつた。それをあたしだ、ふかす前に食べたくて食べたくてな、「二つ欲しい、一つ欲しい」て食つたもんだげんども、んだげんども、伝授ていうのは、蓋をとんねでふかせば、同じ材料で倍にもなるていうたもんだ。おばあちゃんから聞いたもんです。これは母親もよくやつたもんです。んだから、「延長坊のまんじゅう、大きく作つて、おら家の大きな

いから売んね」なんて言うもんだった。真ん中には餛飩こ入って丸べるわけだ。その上に黄色い糯米をポチョツとつけて、ずつと並べておくもんだつけ。

砂子関、本道寺にも坊はいっぱいあった。昔は、米沢からずうつと鮎貝、黒鴨（白鷹町）通って、萱野というところ通って、木川さ来て、一泊して、嫁に行つた家が木川の福寿という宿屋だったから、今日のお客さまは何百何十人て、通知来るんだ。飛脚でよ。ほして白装束で来て、そんで家で錢箱があつて、クルミ八升入るほどのものだったから、八寸の錢箱二つあつたんだ。その丁度したに、朝日川流っているんだ。そこに吊り橋かかっているんだが、その橋は自分の家で修理して、お行さま来つどき、（橋錢）て、小っちゃこい錢箱を入れるわけだ。ほして泊つたらば、大きい錢箱さ入れるもんだった。一文錢、二文錢を入つだもんだが、戦争になつたどき、錢八貫匁出したな。もつたないがつつたげんど、鍵の果てまで出したんだから、仕方ないなあ。シナ袋というて、シナの木の子皮剥いで来て家でたんたんとして作つた袋さ一つあつたもんだな。とにかくそれだけお客さ

るもんだったからな。そいっっちゃ夜になつど、おばあちゃんの代に、八畳間さその銭でつとひろげて、人頼んで、ミゴさ通しておいたもんだ。

大井沢に大日寺という寺あつて、あたしが三つのとき焼けたそうだが、その寺の柱というな、男衆二人で六尺ていう、手が廻わんねがつたそうだ。今でも山門だけ残っているが、その山門さ、お仁王様と籠がぶら下がっている。今は見るかげもなく学校生徒の運動場になってますけど、切り石ずうつと敷かったところうっと、今日は三百人泊るといふときには…。

そこさ小坊主になって、家の父親が行つたそうだ。十五、六の時、そんな時十人まで宿に泊り客増えでも、柄杓で一つずつ水たして間に合う。二十人、三十人ていうど、米を足す。とにかく十人までは柄杓で水たすだけでたくさんだったという話だった。あの境内ていうどすごいもんでよ、わたしだ小さい時分はそれほど感じねげんどよ、今行つてみつど、大した境内だ。すごい杉の木ばり何百本とあつたげんど、今切つて五、六本しかないでしょう。

大井沢村というのは、街道に添つて三里だからな、下から上まで。中央が、中

村ていうところで、村の中心で、そこで生まれたのよ。だから今は農協から駐在所から中学校、小学校、営林署の担当区とか全部そこにあるわけだ。一里上から来る人なんか、下から来る人なんか、分校二つ、冬は置いてあったが、夏は本校に集まるもんだったが、んだど冬、一時間以上も掛かるわけだ。一里ていうど。

部落さ道つけでも、風なんかびゅうびゅうでしょう。んで、ジンベとかオソフキとか履いて、体操場の四どこ（場所）さも火焚いで、掛けて干すわけだ。わたしだ、ほうすつど「下と上の生徒さ、先生、ひいきして、わたしだの干して呉ねで」なて、先生さ喰ってかかったこともある。今考えてみつど、下・上の人はハンバキ履いて来るんだから、ほれ。ジンベイとアクトカケ履いて、ほしてほいつ干さんなねんだも、学校から帰るまで。「いやあ、悪れごと言つたもんだなあ」て、つくづく今それ考えます。

むかしの話なの、今語つたて、誰も本当^{ほん}にしないげどなあ。今の子どもさなの聞かせたて、聞く耳持たね。

おばあちゃんは発句が好きな人で、「四十七士とかけて」「連判の袋破れぬ四十
七、かたいぞ、かたいぞ、ほんにかたいぞ」て、それで賞をとったという話しか
さっだもんだ。仏教のことも随分お聞きした。わたしだ、神道生れだからな。歌
だつて随分理屈に合つたこと教えらつだもんだな。

○火伏せの歌ていうのもあつたな。

「霜柱、氷のケタに雪の梁、雨の垂木に露の吹き草」

これは焼けたなんてないでしょう。理屈から言えばな。祭文語りも来たな。祭
文語りの宿であつた。

○寝つどき泥棒に入らんね歌、

「ねるぞネダ、頼むぞ柱、聞けよ梁、まさかの時は起こせ大びき」

大びきというのは炉のそこにおくもんだ。こういう風に三回詠んで寝れば、泥
棒に入らんね。

○晦日の晩に詠んでねる歌、

「しょうぎやらや、いねやかりねやわが宿に、寝たるはねんど、ねんどねたるぞ」

百姓の歌なんだかなあ。これは晦日の晩にかならず詠んでねろて言わっただんだな。

○火伏の歌がもう一つ。

「高きやにのぼりて見れば何もなし、火石袋ひいしにうぐいすの声」

○眠むらんねときに唱える歌もあつて、これはええ唄だと思っている。繰返して三百ぺん詠むうちに眠むらんねなてないというたもんだ。年寄なんかだど、ねむれないでしょう。んだからそれ唱えるとなええ。

「寝ては釈迦、起きては弥陀の立つ姿、枕の下は浄土なるらん」

○なだれにつかんね歌ていうのもある。百人一首の歌だな。

「山川に風のかけたるしがらみは、流れもあえぬもみじなりけり」

○われわれ、縫いものするでしょう。これは効くでしょう。

「千丈の音羽の滝が埋まるとも、失せたる針は出でぬことなし」

これを詠めば、たとえ針失くしたとしても、針で怪我しないというんだそうだ。

へ 牛 方 と 山 姥 へ （鯖売り）

むかしむかし、あるところに、魚屋さんがあつたんだけどなあ。ほして、鯖売りに出かけたんだど。ほうして鯖、もう少しでなくなつどき、

「もう少し残ったから、はいつばかりも売って行んかなあ」

と思つて、夕方になつたげんども、「鯖、鯖」て、声出して歩いだんだつてよ。ほうしたれば暗くなつたがら、今少し残つたげんど、これ、家さ帰るべなはあと
思つていだら、うしろから、

「鯖一本呉れさい、鯖一本呉れさい」

て、化物、追っかけてきたんだど。ほれから「ほら」つて呉つてよ、ほしてまた「ほら」つて呉で、ほしてこんど困つて困つてはあ、化物に追かけられるもんだから、困つて、こんど箱がらみんなぶんなげて、家さ帰んべと思つたて、方角わかんねぐなつたんだつてよ。

ほして見たれば、向うの方に灯りがポツンと見えつから、そこさもぐり込んだ

んだど。

「今晚一晚泊めて、助けて呉ねが」

と。ほしたれば、おばあちゃんがいて、

「ああ、ええどこでない、泊つてらっしゃい」

というので、泊ったれば、まず夜の御飯は御馳走になって、ほしてなんだかおかしいおかしいと思つて見たら、夜中になったごんだらば、ほのおばあさんが台所さ行つて、一生懸命魚庖丁砥いんだつてよ。ほして砥いで、

「今日はええお客さま来た、なぜにして料理して食つたらええんだかなあ」

て、居だつて。ほしてこんど、庖丁砥ぎ終つて、ほして、

「はてなあ、今夜はええ肴とつじやから、なぜして食べたらええんだが、まず今日は御飯食べだす、夜、何して、これ、ドブロク一杯のんで寝つかない」

て、こんど囲炉裡さドブロクわかしだつて。ほしてこんど魚屋、布団からずうつ

と、こう、天井の上さ登つて見だつて。ほしたればドブロク沸かして、

「どうれ、ドブロク沸くまで、一寝入りすつかなあ」

て、横になつてぐうぐう、ぐうぐう、いびきかいて寝つたど。ほうすつど、草屋根なもんだから、萱とつて、するする、すると上げて、ドブロク飲んだんだど、魚屋。ほうしたら婆さま、目覚まして、こんど、

「おやおや、おやおや、酒なぜになつたか、さっぱりなくなつた。どうれ、ほんじゃ仕様ない。酒、みな、なぜかなつたし、んだれば餅の一つも焼いて食うか」
て、こんど餅焼き始めた。ほしたらば、また横になつて、餅焼けるまででワタシさ、ぐるつと焼いで、ほしたらば餅プウプウとふぐっじやて。ほうすつどまた、萱、ちゆくつと刺して、するするすると上げて、餅みな食つてしまつたれば、こんどまず婆さま目覚ましたど。ほうしたらば餅一つもなくなつた。

「んだれば、これ、餅はなくなつたし、こんじえ何故したらええか、火箸食つたか、アテギ食つたか、スツカエンカエン、火箸食つたか、アテギ食つたが、スツカエンカエン。酒はないべし、餅はないべし、ほんじやこりや寝るほかない。んだればこれなあ、何さ寝たらええか、石の唐櫃さ入って寝たらええべか、木櫃さ入って寝たらええべか、どっちが温かいんだかなあ、今日」

なて言うて、

「はてな、今日は木櫃さ入って寝たらええべ」

ほうして、木櫃さ入って寝たんだど。ほれからこんど、夜明け近くにだったか、真夜中だったか知しゃねげんども、わらわら起きてきて、ほして今度、その魚屋一生懸命お湯沸して、木櫃さ、キリキリ、キリキリ、キリで孔あけたど。ほしたれば、

「ほう、今夜、キリキリ虫だか、キリギリスだか鳴くな、こりや」

て、婆ちゃんが中でいたんだど。ほしてキリキリ、キリキリと何十と孔あけて、お湯がらがら煮立てて、その箱は縄で結つて、ふたどこ結つて、そつとよ。はいつさ、お湯じゃあじゃあ、じゃあじゃあといだんだど。ほうしたれば、

「熱い、熱い、熱い。堪忍だ、鯖売り、堪忍だ」

「堪忍されるもんでない。おれな鯖みな食つたな、お前だべ」

て。ほしてこんど音しなくなつたから開けてみたれば、狸の化物だったど。ほしてはいつ、鯖の代りに狸ば持ち返つて、みんなさ御馳走して喜ばつたど。どー

びんさいすけ。

地域によつて「砂山出ろ」とか「川出ろ」とかてな、やっぱり処々によつて、昔の話はいくぶんちがうところありますな。内容同じと思つてもな。

へ食わず女房へ

むかしむかし、あるところに、一人ばり暮しているええ男いたんだど。ほうしたれば働き者で一生懸命働いていたんだつて。

ある時、娘が尋ねて来て、

「まず、おれば嫁にもらつて呉らんねが」
て言うけども、

「嫁なのもらわんね」
と。ほしたれば、

「おれ、一生懸命、御飯なの食わねったてええから、稼ぐから」

て、それで一生懸命に稼いでけんだど。毎日毎日、息子働きに行ってるわけだ。ほしたれば、嫁はいつでも御飯食べねんだてよ。食べねもんだから、不思議に思っていたんだてよ。ほして、ある時、息子不思議して稼ぎに行くふりして屋根裏さ上がって眺めていだら、松節孔一つあつたんだて。ほっからのぞつていたらば、お昼ごろになつたれば、三升炊きさ、御飯炊いで、おにぎり何十と作つたんだてよ。ほして髪、ちゃんと、昔だから結つてだもんだから、そいつ、ばらつと解いで、オニギリ、すとなすとな、すとなと皆入れて、旦那が帰るまでちゃんと髪結つて、ほして知らん顔しつたんだけど。

いよいよ、五月節句になるんだど。

「んだから、お前も家さ泊りに行つて来たらええんじゃないか」

「いや、行がんだて、ええ」

「初めての里帰りみたいなもんだから、行くべ」

と。ほしてまず御馳走作つて、少しもつて出かけだんだど。ほしたれば、少し

もつて出かけだんだど。ほしたれば、イグイグ、イグイグと山の中さ行つたんだつてよ。ほしたれば、ここまで来たれば、

「おれは本当は、ここの大蛇だ。んだげんもお前と一緒にたてがらは、大蛇なて言ねでいだげんど、家さ行つてこい、行つてこいて言うもんだから来たんだげんども、行つて、お前ば食べつたくて来たんだ」

ていう。そして大蛇の姿になつたんだど。ほしてこんど、自分が大蛇になつて、大きい沼らしいどこさ、男ばも引きこもうとしたんだど。したら、ほん時、男は恐かないていうて、ここに菖蒲とよもぎ、いっばい茂つてくちやくちやというところにいだったそうだ。それで菖蒲とよもぎの間さ隠つたから菖蒲とよもぎは五月節句に屋根さ、必ずさすんだど。そして命からがら逃げてきたんだど、その男がよ。

まま子いじめの話もあつたなあ。萩の橋わたるとで、すべつて転んで死んだどやゝていう歌のある話あつたな。それでも思い出さんね。この次にするべなあ。

へ コンニヤクの舌^{べろ} へ

先妻の子と後妻の子ど、居て、先妻の子ば憎くて、してあの、夜寝てから先妻の子を、後妻の方が鬼面かぶつて、ほしてコンニヤクの舌で、ペタペタ舐めたという話あつたな。にんじんの角つけてな。

今のことなんだけれども、光源寺の住職になつています。置賜生れなんです。今八十二才ぐらいでしょう。そして耐えかねで、お寺に引取らつて来て、お坊さんになった。

へ 猿 聲 入 へ

むかしあつたけどなあ。

むかしむかしのそのむかしあつたけどな。娘三人もったんだけど。ほうして、こんど年頃になつて、前田千刈、裏田千刈と田もつていたな地主だけっただなあ。

んで、それでその人が、

「はてな、家さ髻来てける人ないがなあ。裏田千刈、前田千刈て言えば、相当な財産だから」

それで髻探ししただけども、そしたらその話、田んぼさ行つてつぶやいて話したわけだ。ほしたればそれを猿が聞いて、ほして、ほんどき干魘でね、水あんまり掛んなくて困つていたんだけど。んだから、

「この裏田千刈と前田千刈さ、水だつぷり掛けてける人いたら、どれか娘一人あげる」

と、そういう風につぶやいだんだそうだ。

ほしたらば猿がどこかで聞いてで、ほして「んだれば…」と、お父さんと、あくる日会つて、

「んだごんだら、娘、誰か一人呉でけつこんだらば、おれ、水、明日の朝までだつぷりとかけて呉る」

と。ほして、家さ帰つて来てみたげんども、まず、娘一人呉れるだから、猿に

よ。

「はあ、困ったごんだ」

と思つて、

「お父さん、御飯上がらっしゃいはあ」

て、一番の大きい娘迎えに行つたど。ほしたれば、

「御飯食だくないはあ」

こう言うたてよ。ほして、「なして食ねの」ていうど、

「いや、わけあんのよ」て言うたつてよ。

「そのわけ教えて呉ろ」て言うわけだ。ほしたれば、猿さ、田の水見に朝行つたら、前田千刈、裏田千刈さ、水いっぱい溜つてだど。ほれにはやつぱり猿には約束したんだから、娘一人呉る他ない。

「お前、猿のおかたに行つて呉つかやあ」

て言つたど。ほしたら、

「小ばかりさい。猿のおかたに行つてらんね」

枕ぶつつけて、一番の娘帰って来たつて。ほしてこんど、二番の娘また起こしに行つたんだど。ほしたれば、

「御飯食いたくないはあ」

「なして食ねな、父ちゃん」

て言つたれば、実はこういうわけだ。「ほだな、猿のおかたになの行つてられるもんでないつだな」

また、枕ぶつつけて戻つて来たんだつてよ。ほしてこんど三番目の娘、また起こしに行つたど。ほしたれば、こういうわけで、一番娘も二番娘にもことわらつじやげんど、

「んじや、猿さ約束したな申訳ないから、起きて御飯食うどこでないから、御飯食わんねはあ」

て、お父さん言つたんだど。ほしたれば三番娘がやつぱり利巧な娘で、

「んだれば猿の奥さんに、おれ行んから、起きて御飯食べて呉ろ、お父さん」
て、こう言うたつて言うのよ。

「んだらば、お前行ってけっこんだら、それほどましたことないんだ。んだらば起きて御飯食べっかなあ」

て、起きて御飯食べて、田んぼさ行って見たれば、裏田千刈、前田千刈、やっぱり水だっぷりなっていたわけだ。猿も来て、

「んだれば、おれも約束したんだから、あんたも約束破んねで、おれさ娘一人呉でけんなだべな」

「んだら、上げます」

ということで、三番娘が行ったわけだ。娘が嫁にな。

ほして何か月か経って、節句来たしすつから、餅でも搗いで持って、里帰りすんべと、「んだら、餅搗いてか」て、餅搗いたわけだ。ほして餅搗いたら重箱さ持つて行くべったら、

「重箱くさくて、お父さんは食べない」

「んだら、何さ入って行く」

「何さ入っじゃて食わねがら、臼そのまま背負って行くべ」

「んだら、臼がらみ背負うべ」

て、ほして背負って行くわけだ。ほして行ったら、そこに沢あつて、桜の木満開に、三月だから、桜咲いっただこよ。ほしたれば、

「枝一つ、お父さんさ土産にもって行ったら、なんぼかお父さん、喜ぶべ」

「んだら、はいつ、折って行くべ」

臼おろすべと思つたら、猿が。ほしたれば、

「土くさくて食ね」

ていうから、「んだら、背負ったままか」て言うたら、「んだ、ほうしてもらいたい」て、娘言うたんだど。ほしてこんど、猿、娘そういうふうに言うもんだから、臼背負って、木さのぼって、「この辺か」「もう少し先だ」「この辺か」「もう少し先だ」

こう言うてよ、ほして、その枝、ばりばりと折つて、沢おださ落つてしまつたど。そんな時に猿が詠んだつてよ。

へ 猿沢に流るる命おしくない

あとにお姫がお泣きやるべい

それから娘が家さ帰って来て、裏田千刈、前田千刈の家の後とりになって暮したけど。

あの、鶯と蛙と何かあったのもあったげんど、後先あとさき忘れたのよ。鶯は「うたの助」、蛙は「井戸の中のびっかくりん」という。ほれから「竹林の中の…」化けものが出る話なあ、忘れてしまったなあ。

志田周子ちかさん（大井沢に生れ、女医となり辺地の医療に生涯を捧げた方）は、あたしより四つぐらい若かったんだな。その志田さんの家さ、あたしだ「針仕事習い」に行っただんだもの。あの人だ、子どもの時分、あの人のお父さんは学校の校長先生で、五年、六年はあの人のお父さんから習ったもの。それから村長したんだな。若くしてなくなったね。周子さんは何でも六十前に逝くなつてしまったからね。して弟さんは戦死して、その下の弟さんが家もつてゐるわけよ。原の伝吉

と言え、大井沢でも財産家だったね。ほして大井沢に医者さっぱり居ねど困るというんで、お父さんが一生懸命になって女医にしたわけだ。長女だけんだ。それにアツ子さん、ムツ子さんに、ソウイチロウさんと、四人姉弟だから、その下に今の人がいるんだな。あたしたちのときには、ソウイチロウさんまでしかわからない。ソウイチロウさんは戦死したんだな。

「うん、手まり唄、思い出した」

へ 正月門松 二月は初午

三月おひなさま 四月はお釈迦で

五月はおのぼり 六月てんのう

七月七夕 八月八朔

九月は菊祭 十月恵比須講

招ばれてまいたら

鯛の浜焼 □□の吸物

いっぱいしましょ チュチュ（口を吸う真似）

× ×

味噌 ごんぼ しょうねん太鼓

きりして 刻んで おささこさ

おささこ畑に 一郎が

煙草のみのみ ささやら焼いても

一丁 一丁

おはじきには歌ていうもんじゃないでしょうが、「お一つ、お二つ…」なていうたな。

うちの方に、「シラクラ」という部落で、立木から少し山の方に入ったところだが、シラクラの子どもは学校さ来つど、みな五本指で物を食べるので、五本指で食べると「シラクラ箸」というたもんだ。

絵本で知ってるべげんど、「桃太郎」でも語ってみつか。

〈桃 太 郎〉

むかしむかし、そのむかし。

おじいちゃんとおばあちゃんがいただけなあ。そしておじいちゃん、おばあちゃんは山に柴刈りに、おばあちゃんは川に洗濯に行ったけど。

そうしたれば、洗濯してだら、上の方から大きな桃、ツップツップ、ツップツップと流ってきたから、

「桃こっちやこい、こっちやこい」

て。したら、桃がこっちや来たんだ。ほうしてその桃拾って来て、

「いやいや、ええ桃拾ってきた。こだな大きな桃流って来たら、それ二人で割って食べんべ」

と思つて、まず懷さ入って持つて来た。ほうしたれば、じいちゃんが山から

柴背負つて来たから、

「まず、じいちゃん、じいちゃん。今日川さ行ったらすばらしい、ええことあつた」

「何や、ばさま」

「何て、かにて、まずええごとで、ええごとで、すばらしいええことだ」

ほうしてこんど、ほの桃を出して見せたわけだ。ほして、

「こううな桃拾つて来たから、桃を、まず食べんべ。御飯食べた後」

ほうして昼飯ちゆうはんたべて、桃割んべと思つたら、パカツと割つて、庖丁ほいしよあてたばり

で、中からオギヤオギヤ、オギアと男の子生まつて来たど。んだから、

「ああ、桃から生まつじやから桃太郎と名付んべ」

て、ほして桃太郎と名付けて、ほりやこうする、ああするて、二人で大騒ぎして、ほの子どもさ、昔のことだからミルクなてないもんだから、米をうるかして、ほうしてそれに砂糖を少しまぜて、米の糊をつくつて、ほして大きくなつたれば、まずすぐく力持ちになつて、えらくなつたどな。ほして、殿さまから、

「桃太郎というのは偉い人になったから、鬼が島さ鬼退治に行ってもらうべ」

「ほだな、桃太郎、鬼退治なて行かれるもんでない」

んだげど、やってける、やってけるて、まず言うもんだから、んだればというわけでキミ団子でも作って、はたいてやんべと思つて、じいちゃんとかあちゃんが二人で、トンカパンカ、トンカパンカと粉はたいで、キミ団子を作つて、ほしていっぱい背中さ背負わせて、ほうしてやつたれば、犬来て、

「わいわいわい、わいわいわい。桃太郎さん、一つください、お伴します」
というわけでキミ団子やつて、「んだらお伴にすつからついてこい」て。

ほしたら今度猿がきた。

「桃太郎さん、桃太郎さん、わたしにも一つください、お伴します」

ほして、猿にもやつて、キチ、キチ、キチ、キチして、きじがとんで来た。

「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰のものは何ですか」

「日本一のキミ団子だ」

「おれに一つ下さい」

「わたしは鬼が島さ鬼退治に行くなだから、お伴すっこんだら上げる。お伴すね
こんだら上げない」

「んだら、お伴します」

犬、猿、きじでしょう。ほうして桃太郎が鬼が島さ、酒呑童子いたどこさ行つて、こんど鬼退治はじめて、きじとんで行つて門をあけて、犬と猿と桃太郎と行つたわけだ。

「酒呑童子、桃太郎が来た」

て言うたれば、酒をひょうたんさもつて行つて、それを飲ませたら、みんな酒に酔つて、ごろごろ、ごろごろと転がったわけだ。それを片っ端から鬼の首をとつたりして来て、ほして、車さ、金銀サンゴ、綾錦の七品つんで来たわけだ。こんど殿さまから大した褒美もらつて、じいちゃんとかあちゃんに喜ばつて、そして楽々と暮らしたつけど。

3 山村の動物

へ か つ こ 鳥

春になつど、かつこ鳥ざあ出てくるわけだね。かつこ鳥鳴く時期になつどよ、山の方にヌカ蚊ていうの居んのよ、細かい、ちよつと止まつたて見えないような。すごく羽根のヒカヒカていう蚊いるのよ。それ、田植んどきになつど出んのよ。ほしてカツコー、カツコーて鳴くど、一回カツコーて鳴くど、千万匹のヌカ蚊が出んなだど。んだから、カツコー、ブウ。カツコー、ブウていうど、その度に千万匹も出んなだから、田舎の方では頭に松明、杉の木の皮を細くして巻いたものに火つけて、ヌカ蚊のいるどこの田植えをしたもんだ。平地にはいなくて、谷間のどこに余計にいるんだな。

「ああ、カツコー鳥出たな、ヌカ蚊出るな」
そういうたもんだ。

これは実際にある話だげんど、山奥さ行くどよ、悲しい声出して、雨降りのにきだけ鳴く鳥あるな。ホトトギスと同じで、口から血出して鳴く話あるな。子どもを逝くして、雨降りのどんよりした時でないど、山奥にきりいない鳥なんだ。その鳥鳴くど、おらだも山さ働きに行くの嫌んだなと思つたもんだげんども、鳴き声は忘つたな。

へ時鳥と兄弟へ

兄と弟いて、ほして弟が氣持が荒いていうかな、兄は氣持がやさしいて言うかな、エサとつて来ても、弟さ、弟が「腹へった、腹へった」と言うがど思つて、食べさせるわけだ。ほして兄が氣持あつて、食べさせるわけだ。ほして、兄が氣持あつて、弟さ。

「こだいまいのばり食つてゐるに、あたしばかり食ねなだ」

て、兄の腹をさいてみたわけだ。ほしたら兄はあんまりええもの食っていないくて、弟さばり食わせだど。んだから、

へ 弟悲しや、オタタカ鳥。弟悲しや、オタタカ鳥。

て、八千八声鳴くんだど。んだから口のわきから血たらしで、兄をしのんで鳴くんだつて。

かけすも人の真似するものな。あれは飼い慣らすと、すごく人の真似する。人と同じに鳴きますね。家に飼っておくこともありました。

山兎も飼ったことあるな。んでも山兎っていうのは、飼って六十日ぐらいしか生かしたことなくった。人に慣れないの。んでも一匹でなく二つ一緒に置けば育てられますね。というのは、二十数年も前のことだけだよ、家の前が診療所だったげんどもよ、その医者が山、川好きで、

「おっか、ワラビ、どこさ出る」

というわけ。んだから、「こういうどさ行ぐど出っだから、採ってこい」。こん

ど、「雑魚は？」ていうど、「雑魚は矢捌とか……」て教えてやるわけだ。すつど医者行つて、あるとき兎捕つてきた。一週間ぐらい飼つておいた。家では豆腐、コンニャク、油揚げの卸したけもんだから、それを貰つて呉るというわけだ、その医者さんがよ。昼、箱を入れて、夜は家の中に放すんだ。あっちこっち引つかくから、前足に奥さんのストッキングの古ものの手ざしをはめて呉で、おいたもんだ。その山兎もつて来た。

「んだら、先生からだ、先生からもらつて殺したりしてはいらんね」

と思つたげんどよ、一緒に他の兎と混ぜておいた。人が見てつどきは餌は食べないね。百日ぐらいは食べない。さあこんど豆腐からと草を飼兎に入れてやつてから、そおつと小屋のかけから見でつど、食うようになった。太つたもんだつた。太つてから、「先生からもらつた兎も一丁前にしたから、お返し、し申す」と返して来たつけな。

蛇は一番はじまり、獲物見つけつど、尻尾パタツ、パタツとして弱わらがすもんだ。その後でぐりぐり、ぐりぐり巻くの。これは何回も見た。蛇に吞まつた兎

とかねずみとか蛙とか。蛇の口あけて血出し出し呑むと、溶けて行くわけはあ。ほして出してみっど、鼻っぱしなど溶けてしまっているものよ。蛇に呑み込まつたものは、蛙だろうが兎だろうが、絶対駄目だ。入ったところから溶けてしまうがらな。口の脇から、だらだら血出して呑むものな。それだら何回見たか。

へ 団 子 だ の へ (地蔵浄土)

むかし、あるところに、神信心なじいちゃんとかあちゃんいだけどなあ。ほうして、ある時、二十四日が地蔵さまの日だから、団子こしやえて、上げんべなあて、じいちゃんとかあちゃん、一生懸命、トンカパンカ、トンカパンカと粉はたいて、ほして団子煮て上げんべと思つたれば、団子一つ土さ落つて、コロコロ、コロコロ転んで行つたど。ほうしたれば、

へ 団子どの 団子どの どこまでござる

孔の中の地蔵堂まで

て、団子転んで行つたつて。ほして追っかけて行つたつて。ほしたれば土だらけになつたから、

「お地藏さま、ここにも立つてござるんだな。んだれば煮ねつたて、土だけほろつて、地藏さまさ上げて」

て、まず拝んだつて。ほして、地藏さま言うには、

「晚げ、ござつしやい。晚げ来たごんだら、鬼だち博奕^{ばくち}ぶちに来る。地藏さまのお堂によ。んだがら、おれの言う通りにしている」

てだど。ほして「んだか」て言うて、じんつあま、丑満の刻行つてみたれば、まず地藏さま、「膝さ上がれ」て言つたつて。

「膝なの、もったいなくて上がらんね」

「んだげんど、ほだごと言ねで上^やがれ」

と。ほしてこんど、「肩さ上がれ」

「とんでもない、膝さも上がらんねに、肩さなの上がらんね」

ほしたれば、

「いや、ほう言^やねで、肩^{かた}さ上^うがれ」

こんど、「頭^{かぶ}さ上^うがれ」「頭^{かぶ}さなの、ほれこそもったいなくて上^うがらんね」

「ほだごと言^やねで、上^うがって、おれの言^いう通^とりにする」て、地蔵さま言^いうんだつて。ほしてこんど、

「頭^{かぶ}さ上^うがって、屋根裏^{やねうら}さ隠^{かく}れろ」

て言^いうたつて。ほして屋根裏^{やねうら}さ隠^{かく}つじやれば、赤鬼^{あかおに}、青鬼^{あおおに}いっばい来^きて、博奕^{はくやく}打ち始^{はじ}めたど。丁半^{ていはん}はじめだんだど。ほうしてこんど、

「丁半^{ていはん}はじめたから、黙^{もく}って見てろ。おれがケケコク^{けけこく}て、一番^{いちばん}鶏^{けい}鳴^{なり}く、二番^{にばん}鶏^{けい}鳴^{なり}いて、三番^{さんばん}鶏^{けい}鳴^{なり}くど、鬼^{おに}だ帰^{かえ}って行^いんから、ほれまで我慢^{まんまん}して、屋根裏^{やねうら}に隠^{かく}つでいろ」

ほうしたれば、一番^{いちばん}鶏^{けい}、ケケコク^{けけこく}て鳴^{なり}いた。二番^{にばん}鶏^{けい}、ケケコク^{けけこく}て鳴^{なり}いた。こんど三番^{さんばん}鶏^{けい}、ケケコク^{けけこく}て鳴^{なり}いた。

「ああ、三番^{さんばん}鶏^{けい}鳴^{なり}いた。こんど夜上^{よのう}がりだあ、夜上^{よのう}がりだあ」

て、鬼^{おに}たち、銭^{ぜに}いっばい、みな置^おいて、ほして逃^にげて行^いってしま^{しま}ったど。

「じさま、じさま、この金みな持つてこい。ほしてお前、家さ持つて行げ。はいっだつて、お前が神信心するおかげだから、銭みな持つて行げ」

と、こんど、屋根裏から、地藏さまの頭さあがつて、肩さ上がって、膝さ上がって降つて来て、先祖詣りして、ほして金もらつて来て、じんちゃとばんちゃ、いつも楽々暮らしたけど。

んだから、神信心というものは、いかなる時だて、いつだつて、神信心して悪いていうことはないから、神信心はしなさい。

へ 弘 法 水 へ

弘法大師さまが托鉢したときに、朝日町の八ツ沼というところに、（こっちの端とあっちの端の端きり水無いの、真中は部落百何十軒あつけんども水無いの）に来た。（そこに明神さま建てて、大きな沼あるんだ、ぐるつと廻つど一時間かかるんだ、その沼、八ツ沼という沼だ）

弘法大師さま、托鉢に來たとき、あるおばあちゃんさ、「水吞ませて呉ろ」て言うたらば、「おら家で水吞ませらんね」て。ほしたれば、こっちや來ても、どこ廻つても吞ませねんだど。そんで錫杖で、こことここさついたら、そつから水が出たど。

んだから八ツ沼というどこは、あつちの端とこつちの端とか水出ねて。

× ×

沼から落つてくる「五本樋」から、みんなもらい水だった。手洗うにも香水も風呂水も全部かついで來たものよ。二十年までなんねべ、水道にしたらな。昔はみな五本樋から水かついだもんだ。んだから弘法大師さまは利巧な方だから、ここさは出る、こっちはなんぼしたても出ないんだと知って、水の出るどこに錫杖でつづいたら、水が出たという話だ。

ほれから、大井沢というどこは、鱒の上^のぼんねどこだ。大井沢さ、何^なして鱒が上らねがというど、本道寺の発電所のとこに滝がありますね。あそこの滝が急なために、鱒は鯉とちがって滝のぼり出來ねわけだ。ほして滝のとこさ小さな魚道

作ったわけだ。その時のぼった鱒はふえたこと、ふえたこと、川にあふれるほどだった。大井沢に鱒のいない伝説はこうです。

へ 弘 法 伝 説 へ

大井沢さ弘法さまが托鉢に行ったら、クズフジもないどこなんだ。少しはあつても、全然増えね。

そのころ、ある人が弘法大師さまさ、鱒をクズフジで、大師さまの背中に背負わせだんだって。大師さまだから、生ぐさものは食ねでしょう。それを背負わせたから、

「ここさ、クズフジ出んな、クズフジ出んな」
て、錫杖でついた。

「鱒のぼんな、鱒のぼんな」
て、こう言った。んだから大井沢さ、鱒のぼんねがった。

そう言えば、「サケノスケ、今ここ通る」て聞いたもんだな。んだから夕方暗くなつてから外さ出んなつてな。旧十月二十日の恵比須講の晩のことだ。サケノスケていうのはどだなものだか知しやねげんど、サケノスケにさらわれつから、外さ出るもんでないと言つたもんだ。

へ 福 の 神 へ（歳徳神のはなし）

大晦日だから、臼の中さ今夜入つて寝んべ。年呉^くれで行ぐ歳徳神さま来る晩だから。年呉^けで行んから、臼の中さ入つて寝でつど、年を貰うごとない。んだど、「ここに何人いるから、何枚いるわけだ」というわけで行つてみたら、一枚余るんだど。

「ああ、仕様ないから、臼さでも貼つて行くべはあ」
て、その札、臼さ貼らつてよ。んだもんだから、結局、臼の中さ入つて、かぐつ

でも、そうして年もらったど。

正月の二日の晩に、宝船たたんで、それに書くのは、へ永き夜のおのねむりの、みなめざめ、明日またるる宝船」と書いて枕の下に敷いてねたもんだな。

草履かくしという遊びもあつたな。輪になつて、中に鬼になる人が、ジャンケンでもして負けた人が入り、まずみんなが片方の草履を脱いで、真中に入った鬼へぞうりかくしのなんまいだ

と唱え、さがして、一番最初に見つかった人が、次の鬼になるんだつたな。

山辺（東村山郡山辺町）から半里ぐらい入ったところに「鬼の目」という名の部落ある。そこでは二月の節分の豆まきはしないという話です。

あたしはお産のときに産婆さん、一回も頼んだことない。子ども十二人とりあげてきました。こっちのお産のときは、そっちのばあちゃんが取上げてくれるというように、一回も産婆さんにかかったことない。おれが取上げてやった

中に、指六本ある子どもがあつたな。いとこ同士の結婚だつたな。お産は座産の方が楽です。あたしも座産三人しました。前に大きいアンカンをしてもらつて、上から帯下げてもらつて、力綱だな、寝てお産するよりずっと楽です。エナはヘソの緒から指一つのどこ、青芋糸できりつと結つて、少し置いてもう一つ結つて、真中からプツンと切つたものです。そしてお墓に埋める。

昔は、何でも作つたもんだな。醬油は小麦一斗さハナかけて、煎つて豆一斗ひきわつて、そして合せたものさ糍かけて、それに一回は塩を四貫五百匁、水三斗。そして毎日、かいでつく。百日経おもえば、それは一番しぼり、豆つぶしみたいな機械でしぼつて、それさこんど水を半分、塩も半分入れて、また毎日かいて、それが二番しぼり。それはそのまま食うもの。もう一回三番しぼりをしたものだ。一番しぼりは一年置いても、何年たつてもかぶれたりしない。味が濃いからでしよう。そして三番しぼりと一番しぼりを調合して、カラメルという薬があつたもんだ。それはドロドロして、コールドールの色みたいなので、それを少し入れると、

すごく色がつくもんだった。

今の人、昔の苦勞話しても誰も本氣ほんにしてくれねげんど、こういう経験あんのよ。三つの子ともいると、ヨメと子どもの分として皿に魚一切れくれる。すつど子どもが皆食って、ヨメは食えない。

んだから、嫁もらったら、嫁は嫁、子どもは子どもと、別々に出し、小姑には、「お前だ、ヤキモチやいでいらんねがらな」と教えつだもんだ。

お婆の手ん箱（一）

阿部キヌオさんの語り

昭和五十二年四月二十日 発行

編者 武田 正

南陽市赤湯三二八〇—四

山形短期大学民話研究センター資料叢書

お婆の手ん箱（一） 阿部キヌオさんの語り

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十九年七月二十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

（電話）〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）

『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）

『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）

『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）

『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）

『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年三月再刊）

『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年三月再刊）

『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）

『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）

『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）

『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）

『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）

『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』

『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）

『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）

『お婆の手箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）

『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）

『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

